

- (279) 「警笛」頭を悩ます図書館策」(『立教大学新聞』第一一七号、一九三二年一月一七日。同右、八五頁)。
- (280) 「図書館の夜間開放／日土を除く毎夜八時半まで」(『立教大学新聞』第八二号、一九二九年九月二三日。同右、五九頁)。「大人気の夜間開館」(『立教大学新聞』第八二号、一九二九年十月一日五日。同前、六〇頁)。
- (281) 「夜間開館は廃止／利用者僅小のため」(『立教大学新聞』第八五号、一九三〇年一月十五日。同右、六四頁)。
- (282) 「警笛」夜の図書館」(『立教大学新聞』第二二三号、一九三三年五月二十五日。同右、九一頁)。
- (283) “How the Library is used in the Evening” (『スパックマン・オーヴァトン文書』No.13410)。「立教学院百二十五年史」資料編第一巻、六三六頁所収。ただし、資料集での資料名として記載されている“Report of the Acting Librarian, February–November”<sup>28)</sup>本書で引用した“How the Library is used in the Evening”は別資料。
- (284) 立教大学「昭和十六年度私立大学年報」(『昭和十六年度起学事年報報告綴(一)』)。
- (285) 「米国から洋書四千冊／図書館着々充実」(『立教学院学報』第六巻第一号、一九四〇年一月二八日。前掲『メーザーライブラリー資料集』九五頁)。
- (286) 「図書館だより」(『立教学院学報』第六巻第二号、一九四〇年五月二八日。同右、九七頁)。
- (287) 「遠山郁三日誌」一九四〇年四月二日条(『遠山郁三日誌』三頁)。
- (288) 「図書館の新機軸／本邦最初のオープン制」(『立教大学新聞』第一号、一九四二年一月一日。前掲『メーザーライブラリー資料集』一〇四頁)。
- (289) 前掲「再び図書館に呈して猛省を促す」二七頁。
- (290) 「図書館」(『立教大学新聞』第二六号、一九四三年一月一〇日。同右、一一一頁)。
- (291) 「図書館雑報」(『立教学院学報』第七巻第八号、一九四一年六月七日。同右、一〇一頁)。
- (292) 閲覧課「開館日数入館者数貸出冊数統計」一九四七年六月五日(『貸本圖書月表』立教池袋図書館所蔵)。
- (293) 前掲「貸本圖書月表」。

(注 第三章)

- (1) 内閣府『災害教訓の継承に関する専門調査会報告書 一九三三 関東大震災』(内閣府‘二〇〇六年’) [http://www.bousai.go.jp/kyokuk/kokun/kyokunokeshou/rep/1923\\_kanto\\_daishinnsu/index.html](http://www.bousai.go.jp/kyokuk/kokun/kyokunokeshou/rep/1923_kanto_daishinnsu/index.html)
- (2) *The Spirit of Missions*, October 1923, pp. 645–646.
- (3) *SM*, October 1923, p. 710.
- (4) *SM*, October 1923, pp. 647–651.
- (5) *SM*, October 1923, pp. 653–657.
- (6) *SM*, October 1923, p. 693.
- (7) *SM*, November 1923, pp. 717–721.
- (8) *SM*, October 1923, p. 693.
- (9) *SM*, October 1923, p. 694.
- (10) *SM*, October 1923, p. 695.
- (11) *SM*, October 1923, pp. 696–697.

- (12) *SM*, October 1923, p. 710.
- (13) *SM*, October 1923, p. 694.
- (14) *SM*, November 1923, p. 770.
- (15) *SM*, January 1924, p. 54.
- (16) *SM*, February 1924, p. 130.
- (17) *SM*, March 1924, p. 196.
- (18) *SM*, April 1924, p. 272.
- (19) *SM*, May 1923, p. 344.
- (20) *SM*, October 1923, p. 697. *SM*, February 1924, p. 128. *SM*, June 1924, p. 373.
- (21) *SM*, November 1923, pp. 727-728.
- (22) *SM*, November 1923, pp. 728-729.
- (23) *SM*, November 1923, pp. 730-731.
- (24) *SM*, 1923, pp. 716, 719-721, 727, 729, 730-731, 748-749, 837. *SM*, 1924, pp. 4, 6-7.
- (25) *SM*, November 1923, pp. 722, 726.
- (26) 古坂富城『青山学園入十五年史』(青山学園 一九五九年) 七〇頁。
- (27) *SM*, November 1923, pp. 727-728.
- (28) *SM*, November 1923, pp. 723-725.
- (29) *SM*, November 1923, p. 724.
- (30) *SM*, November 1923, pp. 723-725.
- (31) *SM*, December 1923, p. 814.
- (32) *SM*, January 1924, p. 59.
- (33) *SM*, January 1924, pp. 56-57.
- (34) *Ibid.*
- (35) *SM*, November 1923, pp. 772-773.
- (36) *SM*, November 1923, pp. 747-748, 786.
- (37) *SM*, November 1923, pp. 725-726.
- (38) *SM*, November 1923, pp. 723-725.
- (39) *SM*, April 1924, p. 225.
- (40) *Ibid.*
- (41) *SM*, November 1923, p. 724.
- (42) *SM*, November 1923, p. 725. 44 頁 *SM*, November 1923, p. 766. 〇記 事の終りに「一五〇日由來の向つて組織の變はリテ一 大變の力に對して」云々の語句がある。
- (43) *SM*, November 1923, p. 725.
- (44) *SM*, November 1923, p. 726.
- (45) *SM*, January 1924, p. 59.
- (46) *SM*, March 1924, pp. 148, 150-152.
- (47) *SM*, March 1924, p. 148.
- (48) *SM*, March 1924, pp. 149-152.
- (49) *SM*, March 1924, pp. 152, 198, 274, 295, 311-312.
- (50) *SM*, March 1924, pp. 160-162.
- (51) *SM*, May 1924, pp. 293-295.
- (52) *SM*, April 1924, pp. 221-222, 273-274, 293-295.
- (53) *SM*, April 1924, p. 224.
- (54) *SM*, April 1924, pp. 221-222.
- (55) *SM*, April 1924, pp. 273-274.
- (56) *SM*, May 1924, p. 295.

- (57) *SM*, May 1924, pp. 297-298.
- (58) *SM*, June 1924, p. 410.
- (59) *SM*, March 1924, pp. 153-156, May 292, 297-298, 345, June 410, July 468-469, 476-477.
- (60) *SM*, July 1924, p. 471.
- (61) *SM*, July 1924, pp. 468-469.
- (62) *SM*, November 1924, pp. 722-723.
- (63) *SM*, January 1925, p. 54.
- (64) *SM*, April 1925, p. 198.
- (65) *SM*, April 1925, pp. 197-199.
- (66) *Ibid.*
- (67) *SM*, April 1925, pp. 242-243.
- (68) *SM*, May 1925, pp. 309-310.
- (69) *SM*, July 1927, p. 430.
- (70) *SM*, July 1932, p. 453.
- (71) *SM*, November 1933, pp. 611-612.
- (72) 土田宏成「内閣の対応」中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会『1923 関東大震災報告書』第二編、内閣府、二〇〇九年、六八〜七二頁。北原糸子『関東大震災の社会史』(朝日新聞出版、二〇一一年)六一〜六三頁。
- (73) 東京市役所編『東京震災録』(別輯、東京市役所、一九二七年、第三章第二節第二十款)には震災救護を担った民間組織のなかに宗教団体の項目が挙げられ、神道や仏教団体のほかにキリスト教団体の救護活動が記録されている。同書に見られるキリスト教団体は一〇団体であり、日本聖公会は第四目「基督教聖公会」の項
- 目名でその救護活動の概要が述べられている(六四四〜六四六頁)。
- (74) 「大地しん大火災の跡―東京市聖公会―」(『基督教週報』第四七卷第一六号、一九二三年九月一四日)二頁。稲垣陽一郎「聖公会罹災救護団報告」(『基督教週報』第四七卷第一七号、一九二三年一〇月五日)三頁および前掲『東京震災録』(別輯、六四五頁)。救護団の人的構成は、『基督教週報』の各記事で異同があるが第四七卷第一七号による。なお、「聖公会罹災情報」の発行巻号は、『東京震災録』別輯では一一号とあり、『基督教週報』(第四七卷第一六号)には「…不取敢謄写版刷罹さい情報を出すこととし、既に第三回までを発した。」との記述があることから、『基督教週報』の発行再開後も一定期間、「聖公会罹災情報」は発行されたと推測されるが、原史料の所在は不明である。また、同誌の初号の発行は、九月五日であった(元田作之進「第二回臨時東京教会演説(承前)」、『基督教週報』第四八号第一号、一九二四年一月四日、二頁)。
- (75) 「教役者会―聖公会救護団―」(『基督教週報』第四七卷第一六号、一九二三年九月一四日)一頁。前掲『東京震災録』(別輯、六四五頁)。
- (76) 「東京及其附近の大しん大火に関する聖公会罹さい救護に関して全国聖公会員に訴ふ」(『基督教週報』第四七卷第一六号、一九二三年九月一四日)二頁。
- (77) 前掲「聖公会罹災救護団報告」。
- (78) 「日本聖公会教務院公告」(『基督教週報』第四七卷第一七号、一九二三年一〇月五日)一〜二頁の「臨時罹災救護委員総会」欄お

よび二頁の「臨時罹災救護実行委員会」欄、村尾昇一「聖公会教務院臨時罹災救護委員報告」(『基督教週報』第四八卷第八号、一九二四年二月二二日)一頁。体育館の利用については、「救護部情報」(『基督教週報』第四八卷第三号、一九二四年一月八日、一頁)の救護部事務所の閉鎖に関する記事を参照した。

(79) たとえば、人的な被害として震災による死者・行方不明者の姓名を挙げて報じている。「震災火災の永眠者」(『基督教週報』第四七卷第一八号、一九二三年一月二日)四頁。「震災火災の永眠者」(『基督教週報』第四七卷第一九号、一九二三年一月九日)四頁。

(80) 「震災余録」(『基督教週報』第四七卷第一九号、一九二三年一月一九日)一頁。

(81) 「再び全国各教会に訴ふ 大震災罹災教会救護の爲め」(『基督教週報』第四七卷第一九号、一九二三年一月一九日)五頁。

(82) 同右。

(83) 同右。

(84) 同右。

(85) 同右および「大震大火罹災就眠者記念礼拝式」(『基督教週報』第四七卷第二号、一九二三年一月九日)四頁。

(86) 各団体・個人からの寄附の詳細については、『基督教週報』誌に記載された五回にわたる会計報告に見られる。重複も含めて一三〇団体、八九人(口数)からの寄付を確認することができる。前掲「聖公会罹災救護団会計報告」(『基督教週報』第四七卷第一七号、一九二三年一月五日)三頁。「日本聖公会教務院臨時罹災救護部会計報告(十月廿六日調)」(同誌第四七卷第二号、一

九二三年一月二日)四頁。日本聖公会教務院臨時罹災救護部「会計報告(十一月十二日調)」(同誌第四七卷第二四号、一九二三年一月二三日)四頁。日本聖公会教務院臨時罹災救護部「会計報告(十二月五日調)」(同誌第四七卷第二六号、一九二三年二月二日)四頁。日本聖公会教務院臨時(罹災)救護部会計矢澤賢一「会計報告(大正十三年一月三十一日最終)」(同誌第四八卷第六号、一九二四年二月八日)四頁。

(87) 「救護部情報 教務院臨時罹災救護部閉鎖」(『基督教週報』第四八卷第六号、一九二四年二月八日)二頁。残務は教務院にて取り扱われる予定との記事がみられる(同誌、第四八卷第三号、一九二四年一月八日、一頁)。

(88) 「教役者参考書寄贈」(『基督教週報』第四八卷第二号、一九二四年一月一日)四頁。

(89) 「基督教週報」(第四八卷第八号、一九二四年二月二日付)一頁。

(90) 全体の状況は以下に詳しい。永井均・豊田雅幸「立教史発掘立教のチャペルと関東大震災——発見された十字架の背景を探る」(『立教』第一七九号、二〇〇一年三月)八四〜九八頁。立教学院史資料センター編「立教大学の歴史」(再版、立教大学、二〇〇八年)八七〜九五頁。

(91) 「立教大学」(『基督教週報』第四七卷第一六号、一九二三年九月一四日)二頁。

(92) The Rev. Dr. C. S. Reifsnyder "The Tokyo Horror As Told to the National Council by the Eyewitness", *SM*, November 1923, pp. 717-719.

(93) Department of Missions, "JAPANESE BULLETIN NUMBER 9,"

- October 4, 1923, Japan Records (Record Group 71), Box 136, Archives of Episcopal Church; McKim to Wood, January 17, 1924, JR, Box 115, AEC.
- (94) 宍戸まこと「立教大学の煉瓦校舎(3)」『立教』第一一〇号、一九二七年、七八頁。
- (95) 杉浦庸寿「思い出の立教」『立教』第一一一号、一九二八年、五〇～五三頁。
- (96) 前掲『基督教週報』(第四七卷第一六号)二頁。
- (97) 『Reconstruction Schedule for Japan』, SM, May 1924, p.295. 前掲『立教大学の歴史』九二頁。
- (98) McKim to Wood, July 11, 1924, JR, Box 115, AEC.
- (99) 「校舎の修理完成近々」暖房装置は十二月十五日から」『立教』大学新聞 第七号、一九二四年一月二四日 一面。
- (100) 「立教大学学務館復帰」『基督教週報』第五〇卷第五号、一九二五年四月三日 七頁。
- (101) 「修復完成せる自由の塔」『立教大学新聞』第一四号、一九二五年四月五日 三面。
- (102) Refsander to Wood, May 22, 1925, JR, 123 AEC.
- (103) 「立教大学諸聖徒礼拝堂修復完成感謝礼拝式」『基督教週報』第一卷第一〇号、一九二五年一月三日 五頁。
- (104) 前島潔「立教学院宗教運動の過去及現在」(立教学院ミッション、一九三三年) 八一頁。
- (105) 「専修大学生諸君に告ぐ(関東大震災告知)」『朝日新聞』一九三三年一〇月二二日、朝刊 一面、「専修大学関東大震災告知」『朝日新聞』一九三三年二月三日、朝刊 五面、「大学より 感謝会」『立教 校友会々報』第七卷第一号、一九二四年三月 五頁。
- (106) 「中学より」『立教 校友会々報』第六卷第四号、一九三三年二月一日 二頁。
- (107) 「立教中学校沿革紀要統」(タイムカプセル資料)所収(資料番号・T二)、立教大学立教学院史資料センター所蔵。一九三三年二月一日発行の『立教 校友会々報』(第六卷第四号)には、九月一〇日より復興事務に取りかかったとある。
- (108) 「立教中学校沿革紀要(学校当局者の調による)」(築地の園)第二八四号、一九二六年五月三〇日、(二三頁)。
- (109) 前掲「立教中学校沿革紀要統」。前掲「立教中学校沿革紀要(学校当局者の調による)」(二三頁)。
- (110) 海老沢有道編『立教学院百年史』(立教学院、一九七四年)三一七頁。立教中学校教務課「震災後生徒調査票」(一九三三年一〇月五日現在、立教池袋中学校・高等学校史料室所蔵)。
- (111) 高橋昊「大震災前後」(『立教のあゆみ』改訂版) 立教中学校、一九七一年、四二～四三頁)。
- (112) 「座談会 立教を語る」(前掲『立教のあゆみ』改訂版) 一一三頁。小木鐵彦『愛行』(日本聖公会出版事業部、一九六九年) 二九六～二九七頁。
- (113) 「学校日誌より」一九三三年一〇月一八日条(『いしす』第九号、一九二六年七月) 三頁。
- (114) 「立教のあゆみ」(前掲『立教のあゆみ』改訂版) 一八頁。前掲『愛行』二九五頁。前掲「学校日誌より」一九三三年一〇月一八日条。

- (115) 「学校日誌より」一九三三年一〇月二五日条（前掲『いしすゑ』第九号）三頁。
- (116) 前掲「震災後生徒調査票」。
- (117) 前掲『立教学院百年史』三二六頁。
- (118) 「中学より」（前掲『立教 校友会々々報』第六卷第四号、一九二三年二月一日）二頁。
- (119) *SM*, March 1909, p. 229. 鈴木勇一郎「キリスト教学校におけるキャンパスの建築と建築家—ラルフ・アダムス・クラムの立教大 学和風建築案をめぐって—」（『立教学院史研究』第八号、二〇〇一年三月）三頁。
- (120) 同右。
- (121) 立教学院八十五年史編纂委員編『立教学院八十五年史』（立教学院事務局、一九六〇年）一五八頁。
- (122) 前掲「立教中学校沿革紀要続」。「中学より」（『立教 校友会々々報』第七卷第一号、一九二四年三月二五日）二頁。「学校日誌より」一九三三年二月一四日条（前掲『いしすゑ』第九号）四頁。
- (123) 高橋昊「大震災前後」（前掲『立教のあゆみ—改訂版—』四二—四四頁）。
- (124) 同右。
- (125) 前掲『立教大学の歴史』八九〜九〇頁。大江満「解題」（立教学院史料センター編『THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成（抄訳付）』第四卷、立教学院、二〇一三年）（六六）〜（六七）頁。
- (126) 前掲『立教大学の歴史』九二〜九三頁。
- (127) *SM*, May 1924, p. 305. 前掲『THE SPIRIT OF MISSIONS 立教 関係記事集成（抄訳付）』第四卷、五三八〜五三九頁。
- (128) 前掲『立教学院百年史』二七九頁。
- (129) 「我等は忍べるだけは忍んだ！ 商本一の授業午前復旧要求熾烈を極む」（『立教大学新聞』第六号、一九二四年一月五日）二頁。
- (130) 「座談会 立教を語る」『立教のあゆみ—改訂版—』立教中学校、一九七一年、一一三頁。
- (131) 「依然四十分授業の来年度の大学 中学落成は九月？」（『立教大学新聞』第一〇号、一九二五年一月二〇日）三頁。
- (132) *SM*, April 1925, p. 243.
- (133) *SM*, April 1925, p. 197.
- (134) 小島茂雄「立教中学校短信」（『築地の園』第二八一号、一九二五年六月）二頁。
- (135) *SM*, April 1925, p. 199.
- (136) *SM*, May 1925, pp. 309-310.
- (137) 前掲「立教中学校短信」二頁。
- (138) 同右。
- (139) 前掲「立教中学校短信」二頁、小島茂雄「新校舎に入りて」（『築地の園』第二八三号、一九二六年一月）六頁。ウィリアム・ウィルソンは、一九一六年以降の立教大学の建設工事の際、マーフィー&ダナ事務所から専任の担当者として派遣された建築家であった。第二編第一章第七節を参照のこと。
- (140) 『築地の園』第二八四号、二〇頁。
- (141) 「学校日誌より」一九二五年二月二六日条（前掲『いしすゑ』第九号）五頁。

- (142) 「学校日誌より」一九二六年一月八日条（前掲『いしすゑ』第九号）五頁。
- (143) 「生徒定員変更認可願」（一九二五年一〇月二八日付）および「生徒定員変更ノ件指令案」（一九二五年二月一〇日起案）「立教中学校」、「設置廃止（位置変更、改称）に関する許認可文書・中学校・東京都」（中学校設置廃止認可 東京都 第七冊）国立公文書館所蔵）所収。「学校日誌より」一九二六年一月二一日条（前掲『いしすゑ』第九号）五頁。
- (144) 前掲『立教学院八十五年史』一一頁。「立教のあゆみ」（前掲『立教のあゆみ―改訂版―』一九頁）。なお、伊藤俊太郎「立教中学校二十世紀」一三七―一三八頁（合冊版）では、「少数教育論」についてその原典に疑問を呈している。
- (145) 前掲「立教中学校短信」二頁。
- (146) 多田元一「ひとすじの道」（多田元一、一九七七年）二九七頁。
- (147) 一九一八年二月五日勅令第三八九号「高等学校令」、「官報」第一九〇三号一九一八年二月六日。
- (148) 前掲『ひとすじの道』二九七頁。
- (149) 「立教中学校新築落成式」（『築地の園』第二八四号、一九二六年五月二九日）二三頁。「盛会を極めた立教中学新築校舎落成式」（『立教大学新聞』第三三号、一九二六年五月一日）三頁。
- (150) 小島茂雄「立教中学校新築落成式辞（摘要）」（『築地の園』第二八四号、一九二六年五月二九日）一―二頁。
- (151) ジョン・マキム「設立者としての挨拶」（『築地の園』第二八四号、一九二六年五月二九日）三頁。
- (152) シ、エチ、ライフスナイダー「立教」々育の本旨」（『築地の園』第二八四号、一九二六年五月二九日）四頁。
- (153) 前掲「立教中学校新築落成式辞（摘要）」二頁。
- (154) 前掲「設立者としての挨拶」三頁。
- (155) 前掲「立教」々育の本旨」四頁。
- (156) 前掲「立教中学校新築落成式」二三頁。
- (157) 立教中学校第一回卒業生の一人「1884の礎石」（『築地の園』第二八四号、一九二六年五月二九日）九―一〇頁。なお、「タイムカプセル資料」の由来や発掘時の様子および収藏品については、以下を参照。伊藤俊太郎「立教中学校三代の校舎礎石およびその収納物の報告と考察」（『いしすゑ』第四九号、立教中学校、二〇〇〇年三月）二一―三八頁。鈴木範久「タイムカプセルの中の青年たち」（解題）（『納函記念録（復刻版）学校法人立教学院二〇〇一年』一三四―一四八頁）。
- (158) 小島茂雄「新校舎に入りて」（『築地の園』第二八三号、一九二六年一月）六頁。なお、史料のなかの「スカラシップ（scholarship）」は、学識が博学であることを示している。
- (159) 『各年度上級学校入学者調』（立教池袋中学校・高等学校史料室所蔵、油井原均「昭和初期立教中学校の性格と進学動向」（立教学院史研究）第九号、二〇一二年三月）八七頁。
- (160) 前掲「昭和初期立教中学校の性格と進学動向」八六頁。
- (161) 帆足秀三郎「修史余談」（『PTA会報』第一六号、一九五七年）八七頁。
- (162) 「インタビュー」伊藤俊太郎氏に聞く」（『立教学院史研究』第一〇号、二〇一三年二月）六九頁。
- (163) 前掲「昭和初期立教中学校の性格と進学動向」八九―九〇頁。

- (164) 『築地の園』第一〇九号、一九〇八年二月 一九頁。『築地の園』第一二三号、一九〇九年四月 二二頁。前掲『立教中学校二十世紀』一三九頁。
- (165) 立教中学校一〇〇年史編纂委員会編『立教中学校一〇〇年史』(立教中学校、一九九八年) 一四九頁。
- (166) 藤村憲一郎(一九四九年より立教中学校に奉職)は立教中学校を卒業して國學院大学予科に入学すると、最初の英語の授業で指名を受けて回答したのちに同大学の英語教員から「君、中学どこ」と問われ、「立教です」と返答すると教員は「うん、そうだろうと思った」と回想している。藤村憲一郎「紫匂える」(前掲『立教のあゆみ—改訂版—』四七頁)。
- (167) 以下、前掲『ひとすじの道』二九七、三〇二〜三〇三頁。
- (168) 前掲『立教中学校二十世紀』一三九頁。
- (169) 「観測部より」(『いしすゑ』第一三三号、一九二八年七月) 一九頁。
- (170) 「立教中学校校友会々則」(『いしすゑ』第九号、一九二六年七月 一、七頁)。
- (171) 前掲『立教学院宗教運動の過去及現在』八五頁。
- (172) 「編集後記」(『いしすゑ』第九号、一九二六年七月) 二〇頁、[編集後記—まさを—](『いしすゑ』第一四号、一九二九年二月) 二〇頁。
- (173) 「立教中学校学校市制」(原案)(前掲『タイムカプセル資料』資料番号:T8)所収。生徒心得改訂委員会の構成員は、委員長・諸星寅一、委員滋賀貞、橋仁三郎、中山正文、帆足秀三郎である。
- (174) 「中学校市の区議選挙終る」(『立教大学新聞』第三〇号、一九二六年四月一五日) 三面。前掲『愛行』二九九頁。
- (175) 『築地の園』(第二八四号、一九二六年五月) 一五頁。
- (176) 「市長になる校長さん」(『東京朝日新聞』一九二六年二月一八日朝刊) 七面。
- (177) 田中智子「立教中学校学校市制に関する一考察」(『立教学院史研究』第一〇号、二〇一三年二月) 二八頁参照。
- (178) 「学校市制の提唱」(『いしすゑ』第二二号、一九二八年二月)。
- (179) 小島茂雄「立教中学校市制要領」(『築地の園』(第二八四号、一九二六年五月二十九日) 一五頁)。
- (180) 「市長になる校長さん」(『東京朝日新聞』一九二六年二月一八日朝刊) 七面。
- (181) 『いしすゑ』(第一二二号、一九二八年二月) 二六頁。
- (182) 前掲「立教中学校学校市制に関する一考察」、同「立教中学校学校市制に関する一考察」(二)(『立教学院史研究』第一二二号、二〇一五年二月)を参照。前掲「立教中学校市制要領」一五頁。「立教中学校学校市制」(規程)(『いしすゑ』(第九号、一九二六年七月) 五〜七頁。また、同規定は『いしすゑ』(第一〇号、一九二七年二月) 二〇〜二二頁にも所載されている。なお、学校市制に関する会議録については、「学校市語記録 大正十五年度」(立教池袋中学校・高等学校史料室所蔵)を参照されたい。
- (183) SMJ, September 1926, p.587. 事実、一九二六年二月一八日付の『東京朝日新聞』では、「立教中学校内に布かれる市制」重視される新試み」として、学校市制を紹介する記事が掲載された。
- (184) 「改正 学校体操教練要目 附録 学校教練教授要目」(三宝閣、一九二六年)。

- (185) 前掲『立教学院八十五年史』一四一～一四三頁。
- (186) 「学校日誌より」一九二九年一〇月二十九日条(『いしすゑ』第一六号、一九三〇年二月二十八日)九頁。以下、査閲の概要は、諸星寅一「御査閲を拝して」(前掲『いしすゑ』第一六号、四～七頁)を参照。
- (187) 「学校日誌より」一九二九年一月二十九日条及び二月九日条(前掲『いしすゑ』第一六号)九頁。
- (188) 青木利夫「御査閲を拝して」(前掲『いしすゑ』第一六号)五一～五二頁。
- (189) 小谷咸三「同(御査閲を拝して)」(前掲『いしすゑ』第一六号)五二～五三頁。
- (190) 山口明正「同(御査閲を拝して)」(前掲『いしすゑ』第一六号)五三頁。
- (191) 小島茂雄「学校状況御前報告―東久邇宮殿下御台臨に際して―」(前掲『いしすゑ』第一六号)二～四頁。
- (192) 前掲「立教学院八十五年史」一六一頁。
- (193) 「聖公会教報」(『基督教週報』第四五卷第一二号、一九三二年六月一日)九頁。
- (194) 元田作之進「東京教区の設置に就て」(『基督教週報』第四六卷第一八号、一九三三年三月二日)五～八頁。
- (195) この日本聖公会東京教区・大阪教区の設立については、大江滿「日本人監督(主教)自治管轄教区の形成」(一)、(二)、(三)(『立教学院史研究』第七号、第八号、第九号、二〇一〇年、二〇一一年、二〇一二年)を参照。
- (196) 「日本聖公会第十四総会」(『基督教週報』第四七卷第三号、一九三三年五月八日)一～四頁。
- (197) 「第一回東京教区会」(『基督教週報』第四七卷第四号、一九三三年六月一日)二頁。
- (198) 「第一回大阪教区会」(『基督教週報』第四七卷第七号、一九三三年六月二日)二頁。
- (199) SM, July 1923, p. 437.
- (200) SM, February 1924, pp. 131-132.
- (201) SM, February 1924, pp. 77-79.
- (202) SM, February 1924, pp. 79-81.
- (203) SM, February 1924, pp. 83-85.
- (204) SM, June 1923, pp. 365-367.
- (205) SM, December 1923, p. 844.
- (206) SM, August 1932, p. 525.
- (207) SM, December 1923, p. 839, 844.
- (208) SM, February 1924, p. 127. March pp. 170-171.
- (209) 「本校正帽徽章图案懸賞応募図案(大正七年七月)」(立教学院史資料センター所蔵)。
- (210) 佐藤武夫「我が母校の校章について」(『立教』第一八号 一九六〇年九月)三四～三五頁。佐藤の回想は「何しろ古い事(三十九年前)ではつきりしません」と自ら断っているように、校章の公募の時期や学長の名前などに記憶違いが少なくない。しかし、校章のデザインが生み出された大まかな経緯については、佐藤自らも直接関与していたことであり、それほど事実から外れてはいないと考えられる。
- (211) 前掲「我が母校の校章について」三四頁では「当時の学長杉浦

- 〔貞二郎〕先生〕としているが、当時、杉浦はまだ学長ではないので、元田と推定される。
- (212) 前掲「本校正帽徽章图案懸賞応募函案（大正七年七月）」。
- (213) 前掲「我が母校の校章について」三五頁。
- (214) シ・エス・ライスナイダー「新年メッセージ『神と国の為』（PRO DEO ET PATRIA.）」〔築地の園〕第二八三号、一九二六年一月、一頁。
- (215) 前掲「立教学院宗教運動の過去及現在」八三頁。中沢洽樹「立教学の精神考」『神と国のため』をめぐって（『キリスト教』第十九号、一九二七年）六二頁。
- (216) 前掲「我が母校の校章について」三五頁。
- (217) 今井生（今井寿道）「去今来」立教大学」（『基督教週報』第三九卷第一四号、一九一九年六月六日）一頁。前掲「立教学の精神考」『神と国のため』をめぐって」六七〜六八頁（中沢は伊澤平八郎から今井生「立教大学」についての教示を得たとする）。
- (218) 奇夢樓生「立教学院勇躍の時機」（『立教 立教校友会々報』第六卷第一号、一九二三年一月）一頁。
- (219) 「神と国との為に」／輝く建学のスローガン」（『立教大学新聞』第一一〇号、一九三二年四月二日）三頁。
- (220) 「立教精神講座／大学入学式行はる／保証人會も招集」（『立教学院校友会報』第一四号、一九三四年六月）二頁。
- (221) 海老沢有道「立教学院校歌—日本聖公會関係文献解題（27）」（『チャペルニュース』第一三七号、一九六五年三月）五頁。「立教学院校歌」（『基督教週報』第一六卷第一九号、一九〇八年一月一〇日、九〜一〇頁）および「立教学院校歌」（『築地の園』第一

〇〇号、一九〇八年一月、三六〜三七頁）に掲載の歌詞は次の通りである。

- 一、仰げば上かみに日星あり 俯ふすれば下しもに山河あり  
 智識ちしきの鍵かぎを手にとりて 宇宙うちうの秘密ひそみ発はかなむ  
 六角塔かくかくた下の五百いほひの健児けんじ 聞きけ聞きけ使命しめいは我等われらに下くだれり  
 二、高たかきは天あまよ道みちそこに 低ひきは人ひとよ徳とくこに  
 道みちと徳とくとの両ふた鏡かがみ 踏ふみなゆるめそ進すす進すす次つぎにも  
 六角塔かくかくた下の五百いほひの健児けんじ 知しれ知しれ主義しうぎは我等われらに存ぞんせり  
 三、朝あしたに心こゝろを文ぶんにこめ 夕ゆふに力ちからを武ぶに尽つくし  
 元氣げんきを振ふひ体ていを練ね（『築地の園』では「練ね」り 世よの濁だくろ浪うと戦たたかはむ  
 六角塔かくかくた下の五百いほひの健児けんじ 見みよ見みよ任務にんむは我等われらにか、れり  
 四、真理しんりの光ひかりいや遠とほく 至善しぜんの栄さかいや高たかく  
 四海しがい一家いっかの春はるに遇あふ 身みの幸福しあふくや如何いかならむ  
 六角塔かくかくた下の五百いほひの健児けんじ 立たて立たて希望きぼうは我等われらに満みでり  
 五、正義せいぎをおのが胸むねに当あたて 至誠しじやうをおのが足あしに穿ほき  
 新生命しんせいめいを身みに受うけて 理想りやうきやうの国くにを開ひらくべし  
 六角塔かくかくた下の五百いほひの健児けんじ 行いけ行いけ勝利しやうりは我等われらに属ぞくせり  
 (222) 「座談會」大正時代の立教」（『ニュース・セントポール』第一六六号、一九六五年八月）七頁。
- (223) 「立教音楽今昔物語—祖母と孫の対談」（『チャペルニュース』第一八四号、一九五九年二月）九頁。
- (224) 「多年懸案も遂ついにひになり／斯界しがいの権威けんゐ島崎しまざき氏の作曲さくしやに／大学歌制定せいぢやうさる／交響きやうきやう樂がくの音ねも麗うつくしく『栄光えいこうの立教』を歌うたふ／發表はつぱつ式しき挙あげの日ひ」（『立教大学新聞』第二九号、一九二六年三月一五日）

三面。

(Refrain)

(225) 金子尚一（一九二五年文学部卒業）の発言、前掲「座談会  
大正時代の立教」一三頁。

(226) 前掲『立教学院八十五年史』二九四～二九五頁の間紙。  
「OLD RIKKYO」の歌詞は次の通りである。

Dear, Old Rikkyo, where'er we be

In Nippon's realms or not,

We'll always keep our vows to thee,

Thy teachings ne'er forgot.

(Refrain)

Then may we all once more resolve

As all Rikkyontians should,

That we will truer children prove

And labour for thy good.

When college days have long rolled past,

The memories oft shall come

Of times when we as brothers last

Met soul to soul as one.

(Refrain)

Oh, may these memories ever live

At Alma Mater's shrine,

Oh, may they often pleasure give

And kindle love divine.

Then may thy laurel never fade

Thy sons thy fame extend,

And may these sons, once brothers made

Be brothers to the end.

(Refrain)

(227) 「蛍雪五星霜／名残りを惜む卒業式」〔『立教大学新聞』第一四号、  
一九二五年四月五日〕三画。

(228) 伊澤平八郎「校歌『栄光之立教』について」〔『立教学院史資料  
室だより』第五号、一九八一年三月〕三〇頁。

(229) 前掲「多年懸案も遂ひになり／斯界の権威鳥崎氏の作曲に／大  
学歌制定さる／交響楽の音も麗はしく『栄光の立教』を歌ふ／発  
表式挙行の日」。

(230) 「立教に秀才無し／成績貧弱なる大学歌募集」および「消息一  
束 大学歌作製委員会」〔『立教大学新聞』第七号、一九二四年一  
月二四日〕一・二面。歌詞は次の通りである。

(第一)

武蔵ヶ原の 雲むらむらぎに

今し文化の 黎明は迫まる

我等が母校の 聳えて立てば

正義と自由の 旗旗は高く

見よ北郊の 空にぞなびく

(第二)

芙蓉の英姿を あしたに仰ぎ

クロウウ薫る 広野に立ちて  
 立教その名を 静かに呼ばゞ  
 自由の塔に 曙光はめぐる  
 あゝそは我等の 母校の誇り

(第二)

されば若人 真理と愛の  
 殿堂あらば 住ひて高き  
 理想の光り こゝにぞ仰ぎ

立てし教への 恵みに生きん

来れ友人 われらが庭に

- (231) 「懸案の大学歌作成されん」(『立教大学新聞』第九号、一九二五年一月五日) 三面。

- (232) 油井原均「諸星寅一―「栄光之立教」作詞者の来歴」(『立教』第二二五号、二〇一〇年二月) 六四―六五頁。

- (233) 諸星寅一「立教大学校歌の話」(『立教』第九号、一九五八年六月) 四五頁。

- (234) 「立教大学歌」(『立教大学新聞』第一三三号、一九二五年三月五日) 二面。

- (235) 前掲「立教大学校歌の話」四五頁。

- (236) 「DAINAMITO」(『立教大学新聞』第一四号、一九二五年四月五日) 二面。

- (237) 「いまだし大学歌作曲のこと」(『立教大学新聞』第一七号、一九二五年六月一日) 三面。

- (238) 前掲「立教音楽今昔物語―祖母と孫の対談」九頁。

- (239) 前掲「立教大学校歌の話」四五頁。

- (240) 「作曲者の頭の内て年を越した大学歌の事」(『立教大学新聞』第二七号、一九二六年一月五日) 三面。

- (241) 前掲「立教音楽今昔物語―祖母と孫の対談」九頁。

- (242) 前掲「多年懸案も遂ひになり／斯界の権威島崎氏の作曲に／大学歌制定さる／交響楽の音も麗はしく『栄光の立教』を歌ふ／発表式挙行の日」。

- (243) 前掲「立教大学校歌の話」四五頁。

- (244) 「自由の学府に神の国建設を……YMCAの大抱負」(『立教大学新聞』第三二号、一九二六年四月二五日) 三面。

- (245) 「星経る七十有余年／辿り来し棘の路／長崎時代の一私塾より／自由の学府発達史」(『立教大学新聞』第一一〇号、一九三二年四月二二日) 三面。

- (246) 宮城克安「六十年昔の思い出」(『立教』第一二九号、一九八九年四月) 四〇頁。

- (247) 「新入学生保証人会」(木村重治「本学の設立精神に就て」(『立教学院校友会報』第一号、一九三三年五月) 一〇頁。

- (248) 「新入学生保証人会」(菅田吉「予科学生に対する教育方針に就て」(『立教学院校友会報』第一号、一九三三年五月) 一〇頁。

- (249) 矢沢俊雄「一九三二年商学部卒業」の発言、「座談会」池袋と立教」(『立教』第六七号、一九七二年二月) 二三頁。小川寛一「古き良き時代」(『立教』第二一九号、一九八九年四月) 四二頁。

- (250) 前掲「座談会 大正時代の立教」一三頁。

- (251) 武藤重勝「一九三〇年文学部卒業」の発言、「座談会」昭和前期の立教(上)「(『ニュース・セントポール』第一七六号、一九六六年七月) 一三頁。飯島淳秀「一九三七年文学部卒業」の発言、

- 「(座談会) OBとし(て)、教師として—立教大学を語る」(『立教』第九号、一九五八年六月) 一三三頁。
- (252) 「(放談会) わが青春に悔いなし」(『大学シリーズ 立教大学』毎日新聞社、一九七一年) 一〇七頁。
- (253) 仁木武之助「昭和十年前後の立教ボーイ」(『立教』第二二九号、一九八九年四月) 五七〜五八頁。
- (254) 「取り立て、抱負はないが／従来の弛緩した空気は一掃する／小林新予科長談」(『立教大学新聞』第四九号、一九二七年二月五日) 三面。
- (255) 「出席率不良者は受験資格を附与せず／新予科政策を審議する／予科教授会」(『立教大学新聞』第五〇号、一九二七年三月一五日) 日) 三面。
- (256) 「二十数名が受験停止／予科改革最初の樞玉に挙げられ」(『立教大学新聞』第五五号、一九二七年七月一〇日) 三面。
- (257) 「冷汗か、した学生監の足跡／父兄宛に授業料滞納と不成績な出席の通告状」(『立教大学新聞』第八〇号、一九二九年八月一五日) 日) 三面。
- (258) 前掲「新入学生保証人会」(菅岡吉「予科学生に対する教育方針に就て」) 一〇頁。
- (259) 「『聖鐘』が募集した本学の不平不満／すべて学生の真の叫び」(『立教大学新聞』第九六号、一九三二年二月一九日) 二面。
- (260) 前掲「昭和十年前後の立教ボーイ」五八頁。「(座談会) 昭和前期の立教(下)」(『ニュース・セントポール』第一七七号、一九六六年九月) 四頁。
- (261) 「厳寒の伯林に大野(信三) 教授苦境に陥る／留学費が月たつた五十円／激励金募集に着手／すでに集つた四百余円」(『立教大学新聞』第九号、一九二五年一月五日) 三面。
- (262) 「久保田(富次郎) 氏謝恩会／二十一日新毛贈呈式終了」(『立教大学新聞』第二〇一号、一九三二年六月二十四日) 二面。
- (263) 前掲「(放談会) わが青春に悔いなし」一〇六頁。
- (264) 舟橋快三(一九三四年商学部卒業)「戦前のラグビー—昭和初期の回想」(『立教』第二二九号、一九八九年四月) 五〇頁。
- (265) 岸野松次郎(「キシノ」店主)の証言、住田篤「ぶくろ」の足音」(『大学シリーズ 立教大学』毎日新聞社、一九七一年) 九六頁。
- (266) 金谷鮮治の発言、前掲「(放談会) わが青春に悔いなし」一〇六頁。
- (267) 夏目順(「夏目書房」店主)の発言、前掲「(座談会) 池袋と立教」二七頁。
- (268) 同右、二六頁。
- (269) 武藤重勝「私の学生時代の池袋」(『鈴懸の径 あ、わが青春の立教』シンコー・ミュージック、一九八三年) 四七頁。
- (270) 夏目順の発言、前掲「(座談会) 池袋と立教」二七頁。
- (271) 大曾根梅(「大地屋書店」)の証言、前掲「ぶくろ」の足音」一〇〇頁。
- (272) 「哀れを止めた池袋商店街／夏季休暇で学生を奪はれ／諸商人は青息吐息」(『立教大学新聞』第九〇号、一九三〇年八月一五日) 三面。
- (273) 岸野松次郎の発言、前掲「(座談会) 池袋と立教」二五頁。
- (274) 「学期試験を前に当局の打つた五寸釘／許可証無くでは略装者

- の試験無効」(『立教大学新聞』第三八号、一九二六年七月五日) 一面。
- (275) 「已むを得なければ伝家の宝刀も抜く／大学当局の意志強硬／学生間には賛否の声相半ば／制服制帽勵行問題」(『立教大学新聞』第一七号、一九二五年六月一日) 二面。
- (276) 「予科生は丸帽となる／新学期から実施」(『立教大学新聞』第五〇号、一九二七年三月一日) 三面。
- (277) 前掲「古き良き時代」四三頁。
- (278) 前掲「座談会」昭和前期の立教(下) 五頁。
- (279) 岡田七雄「立教YMCAの歴史(一)——大正末期から昭和三年まで」(『チャペルニュース』第一四四号、一九六五年二月) 二四頁。
- (280) 前掲「座談会」OBとし「て」、教師として—立教大学を語る— 二〇頁。
- (281) 「寄宿舎を廃止しろの声／漸く学園に充つ／優柔不断なる当局を督励して／英文学会、先づ起つ」(『立教大学新聞』第八九号、一九三〇年六月一日) 二面。
- (282) 前掲「座談会」大正時代の立教—一〇頁。なお、旧制高等学校の学生寮では、調理の委託を受けた賄業者の食事に不満がある場合、「賄、征伐」と称して、一部の寮生あるいは寮生全員で茶碗や皿を床に叩きつけるなどの行動に出ることが、一八九〇年代より見られた(上村行世『戦前学生の食生活事情』「ホテルめし」「盛り切り飯」「ソーライ」：史料が語る戦前・戦中・戦後の食料事情。三省堂、一九九二年、三九～四二頁)。
- (283) 「ダイナマイト」大学寮舎の賄」(『立教大学新聞』第七号、一九二四年一月二四日) 一面。
- (284) 「ダイナマイト」今回賄が改善された」(『立教大学新聞』第八号、一九二四年二月五日) 一面。
- (285) 「来学期より味いものが喰へる／寮生の団結効を奏し愈々自治制賄具体化する」(『立教大学新聞』第三八号、一九二六年七月五日) 一面。
- (286) 「初日から大繁昌の大学の食堂／寮生も通学生も大喜び」(『立教大学新聞』第四一号、一九二六年九月一日) 一面。
- (287) 「請負制案可決され食堂値下遂に実現／波乱をきはめた寄宿舎々生大会／十一月一日より断行」(『立教大学新聞』第九二号、一九三〇年一〇月一日) 三面。
- (288) 「早稲田稲門堂が食堂を経営／去る十八日より開業す」(『立教大学新聞』第一一九号、一九三三年一月三日) 三面。
- (289) 「食堂経営応募者一覧」(『食堂関係資料』所収、立教学院史資料センター所蔵)。
- (290) 前掲「早稲田稲門堂が食堂を経営／去る十八日より開業す」。
- (291) 「構内食堂経営者管理規定 附同補則」(一九三三年一月九日施行、「食堂関係資料」所収)。
- (292) 「MENU」立教大学学生食堂(『食堂関係資料』所収)。
- (293) 「管理委員に対する学生課のアンケート用紙」(『食堂関係資料』所収)。
- (294) 前田一男「戦時下の学生生活」(老川慶喜・前田一男編「ミッシン・スクールと戦争—立教学院のディレンマ」東信堂、二〇〇八年)。
- (295) 同右、三九三頁。

- (286) 同右、三九四頁。
- (297) 同右、三九六頁。
- (298) 立教学院百二十五年史編纂委員会編『立教学院百二十五年史』資料編第一卷(立教学院、一九九六年)二九六頁。
- (299) 同右、二九七頁。
- (300) 前掲「戦時下の学生生活」三九七頁。
- (301) 『立教学院百二十五年史』資料編第一卷、三二四頁。『立教大学新聞』には経済学科在学の「苦学生」を取り上げた記事がある。「学園を行く(1)ある苦学者の話」第七七号、一九二九年五月一日、三二面。
- (302) 前掲「戦時下の学生生活」三八一頁。
- (303) 同右、三八三頁。
- (304) 同右、三八五頁。
- (305) 同右、三八七頁。
- (306) 同右、三八九・四二二頁。
- (307) 同右。
- (308) 「学生層に反映する未曾有の不況時代／一体この不景気は回復するのか／何にしても憂鬱な話」(『立教大学新聞』第九〇号、一九三〇年八月一日)三二面。
- (309) 「授業料延期願激増す／未納予科学生卅六名に及ぶ」(『立教大学新聞』第八九号、一九三〇年六月一日)三二面。「香しくない授業料納付状態／不景気の反映は靦面」(『立教大学新聞』第九三号、一九三〇年十一月一日)三二面。「不況を語る授業料の滞納／近く会計課で統計発表」(『立教大学新聞』第一〇一号、一九三一年六月二四日)二面。なお、一九三一年二月二日の『立教大学新聞』の記事「授業料納入良好／愁眉を開いた本学会計課」(第一〇七号、二面)では「本学の授業料納入状態は好成績」と報じている。
- (310) 『国史大辞典』「学生社会科学連合会」の項では、一九二五年七月の第二回大会で「日本学生社会科学連合会と改称」とあるが、『日本大百科全書(ニッポニカ)』の「学生社会科学連合会」の項では、「全日本学生社会科学連合会と改称」とある。
- (311) 荻野富士夫「戦前文部省の治安機能―「思想統制」から「教学錬成」へ」(校倉書房、二〇〇七年)一九頁。
- (312) 同右、一八頁。
- (313) 同右、二〇頁。岡田良平の最初の文部大臣期間は一九一六年一月～一八年九月。二度目の文部大臣期間は一九二四年六月～二七年四月である(秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、二〇〇二年、「岡田良平」の項)。
- (314) 前掲「戦前文部省の治安機能」二二頁。
- (315) 同右、二二頁。
- (316) 「全国の学生が軍事教育に反対の大運動／各校代表者集合し具体的方法を協議す」(『早稲田大学新聞』第五〇号、一九二四年一月一日)三二面。
- (317) 「学生の立場から反軍事教育の叫／全国に波及すべく各大学の同盟成る」(『帝国大学新聞』第九六号、一九二四年一月一日)二二面。
- (318) 「戦争を未然に防ぐは学生と無産階級／武装的平和は昔の夢／主催―軍事教育反対同盟」(『早稲田大学新聞』第五二号、一九二四年二月三日)二面。

- (319) 「憐むべき軍事教育の前途／去る二日午後二時於本大学講堂／軍事教育批判会開催。聴衆五百」(『立教大学新聞』第八号、一九二四年二月五日) 一面。
- (320) 「圧迫に更に氣勢昂めた反軍教示威運動／廿四日午ヶ淵公園で／改めて警視庁の態度を糺問」(『帝国大学新聞』第一〇四号、一九二五年一月二六日) 二面。
- (321) 「軍閥の魔の手／官憲に蹂躪された軍教反対の示威運動／熾烈なる学徒の反軍国運動」(『早稲田大学新聞』第五六号、一九二五年一月二八日) 二面。
- (322) 「問題の軍事教育／目下考慮中／相当有力な反対氣勢／実施となれば強制する」(『立教大学新聞』第一五号、一九二五年四月二〇日) 五面。
- (323) 『立教学院百二十五年史』資料編第一卷、三九八頁(山田昭次執筆の注記より)。
- (324) 同右、三九七～三九八頁。
- 山田昭次の先行研究では、「軍事教練反対運動を担った学生の指導部は、大学当局が排斥するマルクス主義の信奉者であった」ことを指摘し、「立教大学の軍事教練に反対する学生運動の指導者は、陶山俊介(一九二七年商学部商学科卒業)だったと思われる」と記している。立教大学の軍事教練反対運動は、立教大学の新聞学会員が中心的に担っていたと考えられ、陶山をはじめとして新聞学会員と立教大学社会科学研究会(第三編第一章第四節第三項参照)の会員はかなり重なっていたであろうと山田は推測している。立教学院の思想的動向の批判的検討を踏まえて、山田は「危険思想」に対峙する天皇制国家の同伴者となってキリス
- ト教の地位を確保しようとする立教学院または立教大学の首脳部にとつては、『危険思想』に基づいた学生の軍事教練反対運動はとうてい容認できるものではなかったらう」と、立教大学における軍事教練反対運動の展開と、その大学首脳部による抑圧の過程を捉えている(山田昭次「学院首脳陣」と構成員のアジア・太平洋戦争に対する認識と対応」老川慶喜・前田一男編『ミッシェン・スタールと戦争―立教学院のディレンマ』東信堂、二〇〇八年、一七頁)。
- (325) 「時間空間」(『立教大学新聞』第二一号、一九二五年二月五日) 一面。
- (323) 「討論に討論を重ね／新聞聯盟規約成る／小樽高商軍教問題は提出校より撤回」(『立教大学新聞』第二四号、一九二五年一月一五日) 二面。
- (327) 「立教大学―新聞押取され演説禁止／校長、学生監の排斥」(『教育週報』第二七号、一九二五年一月二二日) 七面。
- (328) 岩田光子「千葉亀雄略年譜」(『千葉亀雄著作集』第五卷、ゆまに書房、一九九三年) 三五四頁。
- (329) 「正義を叫んで鋭鋒は冴ゆ／雨にめげず押寄せた聴衆熱心に／学術研究擁護講演会」(『帝国大学新聞』第一四二号、一九二五年一月一六日) 五面。
- (330) 「反動団の狙う二つの講演／早大と報知のホールで」(『読売新聞』一九二五年一月二日朝刊) 三面。
- (331) 立教大学新聞・早稲田大学新聞・帝国大学新聞「共同宣言」一九二五年一月一〇日(『立教大学新聞』第二四号、一九二五年一月一五日) 二面。

- (32) 「反軍教宣言から新聞を没収／学長の横暴を非難し立教生騒ぐ」  
 『東京日日新聞』一九二五年一月一日朝刊 一一面。
- (33) 前掲「立教大学―新聞押収され演説禁止／校長、学生監の排斥」。(論説) 軍事教育の撤廃を叫ぶ(『立教大学新聞』第二四号、一九二五年一月一日) 二面。
- (34) 前掲「反軍教宣言から新聞を没収／学長の横暴を非難し立教生騒ぐ」。
- (35) 「論説と宣言を取消し発表／立大新聞の解決」(『読売新聞』一九二五年一月一日朝刊) 三面。鈴木正雄「発売禁止号を回顧して」(『立教大学新聞』第五八号、一九二七年一月五日) 六面。
- (36) 前掲「(論説) 軍事教育の撤廃を叫ぶ」。
- (37) 前掲「論説と宣言を取消し発表／立大新聞の解決」。
- (38) 「紫鉛筆」(『読売新聞』一九二五年一月一日朝刊) 五面。  
 『立教大学新聞』創刊一〇周年の関連記事の一つでも、「共同宣言上には(中略)紫の横線をスタンプして『学校当局はこの記事をオミットする』の意志表示がしてあつた」とする(長谷川直美「屠籠供養―学会ナンセンス史」『立教大学新聞』第一〇六号、一九三二年一月一日、三面)。
- (39) 陶山俊介「軍教反対運動を想起す」(『立教大学新聞』第一〇六号、一九三二年一月一日) 三面。
- (40) 前掲「発売禁止号を回顧して」。前掲「軍教反対運動を想起す」。
- (41) 「(論説) 大学新聞の使命―大正十五年を迎ふる辞」(『立教大学新聞』第二七号、一九二六年一月五日) 一面。
- (42) 「当局の態度如何／大学内に挙げられた軍事教育可否の声」(『立教大学新聞』第二四号、一九二五年一月一日) 二面。
- (43) 前掲「立教大学―新聞押収され演説禁止／校長、学生監の排斥」。
- (44) 前掲「問題の軍事教育／目下考慮中／相当有力な反対気勢／実施となれば強制する」。
- (45) 「配属将校を迎へた本学の軍事教育／いよ／九月から角帽の兵隊さんが：」(『立教大学新聞』第二二号、一九二五年九月二五日) 二面。
- (46) 「配属将校及教練ニ従事スル学校職員服務規定」第一条(諸規程級)立教大学。
- (47) 「配属将校及教練ニ従事スル学校職員業務分担表」(諸規程級)立教大学。
- (48) 前掲「座談会 昭和前期の立教(上)」一五頁。配属将校の在任期間は「立教大学における配属将校・教練教師等の変遷」豊田雅幸作成。『遠山郁三日誌』五〇四頁) 参照。
- (49) 前掲「問題の軍事教育／目下考慮中／相当有力な反対気勢／実施となれば強制する」。
- (50) 諸井忠一「立教学生文化運動小史」(『立教大学経済学会誌』第一八号、立教大学経済学会、一九四〇年二月) 一五頁。
- (51) 前掲「問題の軍事教育／目下考慮中／相当有力な反対気勢／実施となれば強制する」。
- (52) 前掲「配属将校を迎へた本学の軍事教育／いよ／九月から角帽の兵隊さんが：」。
- (53) 前掲「古き良き時代」四三頁。
- (54) 前掲「『聖鐘』が募集した本学の不平不満／すべての学生の真の叫び」二面。

- (355) 「警笛『和して同ぜず』とは……」〔立教大学新聞〕第九七号、一九三二年三月一九日、二面。
- (356) 「本学の教練／配属将校談」立教大学新聞（第一〇六号、一九三一年一月一九日）二面。
- (357) 逸見勝亮「北海道帝国大学と『陸軍現役将校学校配属令公布十五周年記念親閲拝受式』（一九三九年）」〔北海道大学大学文書館年報〕第一号、二〇一六年）二〇、一九、一三三頁。
- (358) 帝都教育会編『御親閲拝受記念写真真帖』（帝都教育会、一九三九年）四八、五〇、一〇六、一一六頁。
- (359) 「世界大百科事典」「学生運動」の項『国史大辞典』「学連事件」の項。
- (360) 前掲『戦前文部省の治安機能』二五～二六頁。
- (361) 同右、二七頁。
- (362) 同右、二九～三〇頁。
- (363) 『公文類聚』（一九二七年・第五十一編・第五卷・官職三・官制三（文部省）、国立公文書館所蔵）。
- (364) 前掲『戦前文部省の治安機能』二八頁。
- (365) 『国史大辞典』「三・一五事件」の項。
- (366) 前掲『戦前文部省の治安機能』三三頁。
- (367) 文部省学生部「第五十七帝国議会説明材料」一九二九年二月（荻野富士夫編・解説『文部省思想統制関係資料集成』第一巻、不二出版、二〇〇七年、二八～二九頁）。
- (368) 同右、二八頁。
- (369) 同右、三二頁。この時の官制改正については、一九二八年一月二九日勅令第二四八号、勅令第二五九号による『官報』第五五五号、一九二八年一月三〇日）。
- (370) 前掲『戦前文部省の治安機能』四二頁。
- (371) 同右、四三～四四頁。
- (372) 同右、四五頁。
- (373) 「秘密結社日本共産党再組織運動関係者検挙概況」（『特別高等警察資料』第二輯第三号、内務省警保局、一九二九年七月）四一六、四二三頁（社会問題資料研究会編『特別高等警察資料』第四分冊、東洋文化社、一九七三年）。
- (374) 前掲『立教学生文化運動小史』一三頁。
- (375) 「経済学研究会の解散」〔立教大学新聞〕第六号、一九二四年一月五日）一面。前掲『立教学生文化運動小史』一四～一五頁。
- (376) 前掲『経済学研究会の解散』。
- (377) 「マルクス生誕を機に思想団盛返す／その後鳴を鎮めて居たが実行運動には関係せぬと」〔東京朝日新聞〕一九二四年四月二七日朝刊）一面。
- (378) 前掲『経済学研究会の解散』。
- (379) 「研究方針定る／経済学研究会／来学期の講義」〔立教大学新聞〕第八号、一九二四年二月五日）一面。
- (380) 「新学生監岩佐球蔵先生／学生諸君の来訪を希望せらる」〔立教大学新聞〕第一〇号、一九二五年一月二〇日）三面。
- (381) 「警笛『戦術』」〔立教大学新聞〕第八七号、一九三〇年四月一日）五頁、三面。
- (382) 「尖鋭化する思想問題」〔立教大学新聞〕第九五号、一九三二年一月二二日）三面。
- (383) 大島泰平「あの頃」〔立教大学経済学会誌〕第一八号、立教大

- 学経済学会、一九四〇年二月）一四五―一四六頁。
- (384) 「二三の条件付で経済学会新生す／漸く一通りの体裁を整へて／九月から研究開始」（『立教大学新聞』第七九号、一九二九年七月一日）三面。
- (385) S・T「回想記」（『立教大学経済学会誌』第一八号、立教大学経済学会、一九四〇年二月）一四三頁。
- (386) 前掲『戦前文部省の治安機能』三七―三八・五七頁。
- (387) 「学生監の名称消え学生課主事生る／学友会事務をも統轄して／学生課長に岩佐氏」（『立教大学新聞』第九〇号、一九三〇年八月一日）二面。
- (388) 「事務分掌規程」（一九三〇年七月制定、立教大学教務課「諸規程綴」）。
- (389) 「思想関係ヨリ見タル訓育方法」（文部省学生部、一九三二年三月）二九頁（思想調査資料集成刊行会編『文部省思想局思想調査資料集成』第二卷、日本図書センター、一九八一年）。
- (390) 「私立大学学生主事、学生監会議」（『思想調査資料』第九輯、文部省学生部、一九三二年二月）一九〇―一九二頁（思想調査資料集成刊行会編『文部省思想局思想調査資料集成』第三卷、日本図書センター、一九八一年）。
- (391) 同右、一九一頁。
- (392) 前掲「尖鋭化する思想問題」。
- (393) 西堀啓策「暑い印象」（『立教大学新聞』第一〇六号、一九三二年一月一日）三面。
- (394) 「プロ文」は法度で／新芸術派の作品／検閲嚴重な立教文学」（『立教大学新聞』第一〇〇号、一九三二年五月三〇日）二面。
- (395) 「無料診断所を設け学生の便宜を計る／すでに貸間の紹介も無料で／消費組合の活躍」（『立教大学新聞』第八四号、一九二九年二月一日）三面。
- (396) 「消費組合設立案条件つきで許可／校外に置くならよい／常任委員会の決議」（『立教大学新聞』第七七号、一九二九年五月一日）三面。
- (397) 「近く拡大週間で組合員獲得を計る／学消学内移転は望み薄か」（『立教大学新聞』第九五号、一九三一年一月二日）二面。
- (398) 「突如『学生の店』公認を取消さる／全国的結成を前にして」（『立教大学新聞』第一〇一号、一九三二年六月二日）二面。
- (399) 「『学生の店』に危機・漸く迫る／学校当局保証人に組合脱退の可を説く」（『立教大学新聞』第一〇三号、一九三二年八月一日）二面。
- (400) 向山寛夫『東京学生消費組合史』（中央経済研究所、一九八四年）三〇三、四一五頁。
- (401) 「立大の学生廿余名検査／『赤い』策動」（『読売新聞』一九三一年五月一六日朝刊）七面。これにとまない、部員数名が検査された弁論部では学期中の校内外の催事を自発的に中止したほか、立教学消や新聞学会などでも催事を中止したという（弁論部の活動中止す／恵まれざる今学期『立教大学新聞』第一〇一号、一九三二年六月二日、二面）。
- (402) 前掲『東京学生消費組合史』三〇二頁。
- (403) 同右、二二〇頁。
- (404) 同右、二二〇頁。
- (405) 「弾圧をしたのも学校の為めだ」／前学生課長岩佐氏談」（『立

教大新聞」第一一五号、一九三二年九月二二日）三面。

(406) 「新入生諸君に寄す」〔『立教大学新聞』第八七号、一九三〇年四月一日〕三面。

(407) 「イージー・ゴイング／之ぞ立教スピリット／しかし社会的情勢はその存在を許さぬ！」〔『立教大学新聞』第九三三号、一九三〇年一月一日〕三面。

(408) 諸井忠一・田辺邦彦「立教大学経済学会十年史」〔前掲『経済学会誌』第一八号、一三八～一三九頁〕。

(409) 前掲「回想記」一四三頁。

(410) 前掲「尖鋭化する思想問題」。

(411) 「時局に鑑み／献金箱提げて街頭へ進出／当局の支持で結成された在満同胞慰問学生聯盟」〔『立教大学新聞』第一〇六号、一九三二年一月一日〕二面。

(412) 「警笛」一つの抗議」〔『立教大学新聞』第一〇六号、一九三二年一月一日〕二面。

(413) 前掲「軍教反対運動を想起す」。

(414) 前掲「立教大学経済学会十年史」一四一頁。

(415) 「校内図書館の利用」〔『ムサシノ』第五号、一九三二年二月二二日〕一面。

(416) 浜田敬一「(公海)『図書館に呈す』」に応ふ」〔『立教大学新聞』第一一五号、一九三二年二月五日〕二面。

(417) エス生「吾等の黄金時代」〔『会員名簿 昭和三年度』立教学院校友会、一九二八年〕二頁。

(418) 「立教大学々友会規則」〔『立教学院立教大学要覧』私立立教学院立教大学、一九一七年三月。『立教学院百二十五年史』資料編第

一卷、三七二頁所収〕。

(419) 「学友会新会則／部長会決定の草案全文」〔『立教大学新聞』第七六号、一九二九年四月二〇日〕二面。

(420) 『学内団体一覽』文部省教学局、一九四〇年〔『立教学院百二十五年史』資料編第一巻、三七九頁所収〕。

(421) 「大学体育の実状 立大／揃った二十七部門／小人数でも全校過半は運動部員」〔『朝日新聞』一九三九年三月一〇日朝刊〕八面。

(422) 「譲歩的態度で波瀾無く分配／体育会予算案」〔『立教大学新聞』第六五号、一九二八年五月二七日〕二面。「前哨戦を裏切った学友会予算委員会／辞退した野球部予算は対同志社競技費用へ」

〔『立教大学新聞』第一〇〇号、一九三二年五月三〇日〕二面。

(423) 「学友会各部の予科生分布表／興味ある運動学芸両部勢力／本学会調査部の発表」〔『立教大学新聞』第一〇四号、一九三二年九月三〇日〕二面。

(424) 前掲「大学体育の実状 立大／揃った二十七部門／小人数でも全校過半は運動部員」。

(425) 「五十に余る各部の活動」〔『立教学院校友会報』第七号、一九三二年六月〕六頁。

(426) 前掲「学内団体一覽」三七九頁。

(427) 『立教大学体育会陸上競技部創部90周年記念誌』〔立教大学体育会陸上競技部・立教大学紫聖会、二〇一〇年〕一一九～一二二頁。

(428) 宮本正明「史料紹介」百瀬和夫『アメリカ遠征日誌』(1932年4月7日～7月2日)〔『立教学院史研究』第一一〇号、二〇一四年〕一二七～一二六頁。

(429) 「オリンピック」(夏季)に出場した立教生・校友」<https://www.>

- rikkyo.ac.jp/about/activities/rokyo\_2020/qo9\_cdr-000000b6e-atr/rikkyo.pdf (立教大学ホームページ)「東京オリンピック・パラリンピックプロジェクト」
- (430) 「立教大学バスケットボール部年表」(『立教大学バスケットボール部創部60周年記念誌』立教大学バスケットボール部OB倶楽部60周年記念事業委員会、一九八五年)二六〇～二六二頁。「立教大学体育会水泳部年譜」(『立教大学水泳部八十周年誌—時間を超えて』立教大学体育会水泳部OB会、二〇〇〇年)二一一～二一二頁。「主な競技会出場者と優勝者」(前掲『立教大学体育会陸上競技部創部90周年記念誌』)一〇二頁。
- (431) 中澤篤史「オリンピック日本代表選手団における学生選手に関する資料検討—1912年ストックホルム大会から1996年アトランタ大会までを対象に」(『一橋大学スポーツ研究』第二九号、二〇一〇年)三七頁。
- (432) 安川茂雄『近代日本登山史(増補)』(四季書館、一九七六年)四五五、四六九頁。
- (433) 「池袋より」(『立教 立教校友会々々報』第六号、一九一九年五月)六頁。
- (434) 「(大学より)柔道場開き」(『立教 立教校友会々々報』第六卷第三号、一九二三年七月)五頁。前掲「大学体育の実状 立大/揃った二十七部門/小人数でも全校過半は運動部員」。立教大学管財部施設課編『立教大学煉瓦造体育館建物調査報告書』(立教大学、二〇〇三年)一一頁。
- (435) 「体育主事の発案で体育館改造に決定/多少の反対を押し切り近く着手」(『立教大学新聞』第九五号、一九三一年一月二二日)三
- 面。
- (436) 岸浩三「新らしき学の園」(『立教 立教校友会々々報』第二卷<sup>マ</sup>第三号、一九一九年四月)二頁。
- (437) 「立教大学卒業式」(『立教 立教校友会々々報』第二卷<sup>マ</sup>第三号、一九二〇年四月)四頁。「大学より」(『立教 立教校友会々々報』第五卷第二号、一九二二年七月)五頁。
- (438) 「大学より」(『立教 立教校友会々々報』第六卷第四号、一九二三年二月一日)五頁。
- (439) 「立教大学体育会陸上競技部90年史」(前掲『立教大学体育会陸上競技部創部90周年記念誌』)一八頁。
- (440) 「陸上競技部の報告」(『立教学院校友会報』第一三三号、一九三四年三月)二頁。舟橋快三「戦前のラグビー部 昭和初期の回想」(前掲『立教』第二一九号)四八頁。大学当局では、予科校舎の新築に際して運動場を建設予定地としたことから、一九三五年一月に清水組の運動場(石神井)を代替の運動場として運動部の現役員やOBと交渉したが、「同所は転地として適当ならずと反対」を受け、不調に終わった。翌一九三六年四月に入り、「グラウンド問題に付了解を得」たこと、「予科校舎建築のためグラウンドを石神井清水組グラウンドを使用し更に式千坪借用使用することになす」ことが事務打合会で報告されている(『大学協議会議事録』一九三五年二月一〇日条・一九三六年四月一六日条、立教学院史資料センター所蔵)。
- (441) 豊田雅幸『立教の学び舎—キャンパスと校舎の移り変わり』(立教学院、二〇一三年)四九頁。
- (442) 「剣道部道場愈々落成」(『立教大学新聞』第九五号、一九三二年

一月(二日) 三面。当初は体育館のバスケットコートを利用して  
いたようである(「体育館に増へた/新設剣道々場/当分は籠球  
場にて」『立教大学新聞』第五三号、一九二七年六月一日、二  
面)。

(443) 「立教大学籠球部新設コート開きの式挙行さる」(『立教学院校友  
会報』第二号、一九三四年三月) 三頁。

(444) 「拳闘部道場落成」(『立教学院校友会報』第一四号、一九三四年  
六月) 五頁。

(445) 「面目一新せる弓術部の道場」(『立教大学新聞』第四八号、一九  
二七年一月一日) 三面。須藤吉之祐「大学の近況を語る」(『立  
教学院学報』第四卷第一号、一九三七年一月) 六頁。前掲「大学  
体育の実状 立大/揃った二十七部門/小人数でも全校過半は運  
動部員」。口絵3口「立教学院敷地平面図」(一九三七年)。

(446) 「立教大学グラウンドご案内」および「秋雨にた、られた球場  
開き」(『立教大学新聞』第二三二号、一九二五年一〇月一日) 三  
面。

(447) 「野球部合宿落成す」(『立教大学新聞』第八〇号、一九二九年八  
月一日) 二面。

(448) 「立教水泳部でプール建設」(『読売新聞』一九三二年四月八日朝  
刊) 五面。

(449) 「プール開き」(『立教学院校友会報』第二二二号、一九三三年九  
月) 四頁。

(450) 前掲「大学の近況を語る」六頁。

(451) 前掲「立教大学体育会陸上競技部90年史」二二頁。

(452) 前掲「立教学院八十五年史」一八二〜一八三頁。

(453) 「校報・雑報 両グラウンド完成す」(『立教学院学報』第三卷  
九月号、一九三六年九月) 二頁。柏倉敬司「成増の『立教大学  
グラウンド』について」(『立教』第一五五号、一九九五年一月)  
二六頁。

(454) 「校地変更認可申請」一九三六年四月三日(立教大学諸申請  
書・認可書綴(工))、立教学院資料センター所蔵。前掲「(校  
報・雑報) 両グラウンド完成す」二二頁。前掲「大学体育の実状  
立大/揃った二十七部門/小人数でも全校過半は運動部員」。

(455) 蓬萊山人「大学のスポーツと世間」(『立教大学新聞』第九三三号、  
一九三〇年一月一日) 二面。

(456) 「スポーツの興行化」(『立教大学新聞』第九三三号、一九三〇年一  
月一日) 二面。

(457) 「(社説) スポーツ大衆化の問題」(『立教大学新聞』第一〇五号、  
一九三二年一〇月二日) 二面。なお、一九二八年の「三・一五  
事件」以降、学生に対する「思想問題」の対応策として文部省は  
スポーツの奨励を指示するようになり、左翼勢力を中心としてこ  
れに対する批判がなされた。学生運動の側もスポーツの「悪用」  
反対、スポーツの「大衆化」などを掲げ、各校で選手制度・応援  
団・対校試合の廃止や校友会費の値下げといった校友会の改革運  
動が展開された(坂上康博『権力装置としてのスポーツ』講談社、  
一九九八年、八六〜八九・一四九〜一五〇頁)。『立教大学新聞』  
の紙面でも、「選手制度の下に一人の英雄を作らんがために多く  
の無視されたる学生大衆に対するスポーツの大衆化はいかに?」  
というテーマのもと、運動系団体の人々の意見を掲載している  
(第一〇六号、一九三二年一月一日、五面)。

- (458) 前掲『聖鐘』が募集した本学の不平不満／すべての学生の真の叫び」二面。
- (459) 前掲『立教学院八十五年史』一九〇〇～一九三三頁。
- (460) 同右、一九二〇～一九三三頁。
- (461) 同右、一九二〇～一九三三頁。
- (462) 「座談会」立大文化運動の潮流」(「ニュース・セントポール」第八九号、一九五九年二月二日) 三・四頁。
- (463) 「例年に見えない静粛さで／学友会予算総会終る／出席人員百八十名で／予算案異議なく可決」(『立教大学新聞』第三八号、一九二六年七月五日) 一面。
- (464) 「劇研究会」(『立教大学新聞』第六号、一九二四年一月五日) 一面。
- (465) 前掲「座談会」立大文化運動の潮流」二～三頁。
- (466) 同右、三頁。芽生座は岡田八千代(小山内薫の妹) 主宰の児童劇団(早稲田大学演劇博物館編『演劇百科大事典(新装復刊)』第一巻、平凡社、一九八四年、四一六頁)、新劇場は六代目坂東襄助(八代目坂東三津五郎)による結成(日外アソシエーツ編集部編『新撰芸能人物事典』日外アソシエーツ、二〇一〇年、六八二頁)。未明座は、市川翠扇・花柳喜章・小堀明男・河合明石・河合栄二郎・森赫子など「新派御曹司」が結成した新派の「勉強会ともいへべきもの」で、その中には藤井昇(田中昇太郎、一九三一年文学部卒業)が含まれていたという(田村武敦「想い出の小箱」、立教大学史学会編『立教大学史学会小史』立教大学史学会、一九六七年、四四頁)。
- (467) 「結成された文化聯盟／立教史に燦然／足並揃へた諸団体の期待は今後の活躍」(『立教大学新聞』第一二二号、一九三二年六月二二日) 二面。
- (468) 「その後の文化聯合会」(『立教大学新聞』第一一三三号、一九三二年七月八日) 二面。「若き文化聯合主催の光輝ある文化祭／燃ゆる熱意と期待の裡に／十一月一日盛大に開催」(『立教大学新聞』第一一六号、一九三二年(〇月)一九日) 二面。
- (469) 「されば歌へさらば踊れ／全立教大運動会」(『立教大学新聞』第二三三号、一九二五年一月一日) 二面。「(雑報) 体育祭挙行」(『立教学院学報』第三卷二月号、一九三六年二月) 一五頁。
- (470) 「建学以来の盛況／第一回文化祭／大成功を以て終る」(『立教大学新聞』第一二七号、一九三二年一月一七日) 二面。
- (471) 「協議会記録」(『立教学院校友会報』第一二二号、一九三三年九月) 四～五頁。「立教祭」同前、三頁。
- (472) 「両学友会交歓対抗盛大裡に円満終了／波乱後勝負の保留を決定して／懸案遂に実現す」(『立教大学新聞』号外、一九三二年九月三〇日) 一面。「全立教と全同志社の学友会各部対校競技大会」(『立教学院校友会報』第三号、一九三二年九月) 四～五頁。
- (473) 「立教対同志社対校競技大会」(『立教学院校友会報』第八号、一九三二年九月) 四～五頁。「立教大学同志社大学学友会交歓大会日割及場所」(『立教学院校友会報』第一二二号、一九三三年九月) 三頁。両校の交歓大会については、一九三三年六月の大会終了後、七月に同志社より総長・財務部長・庶務部長が立教に來校して「中止申出」がなされたという。その理由としては、「財政上困難なる事、教授会に反対ある事並に実施時期等に就て考慮を要する事等」が挙げられたとする。立教では、この申出に関して学友会

- 部長会および学友会委員に報告したところ、前者は「一旦中止の止むを得なきもの」と認め、後者は「大体に於て中止に異存なき模様」であった（『大学協議会議事録』一九三三年九月二六日条）。
- (474) 「園の昨今」（『築地の園』第八号、一八九八年二月）一〇頁。
- (475) 「立教中学校学友会々則」（『いしすゑ』第九号、一九二六年）『立教学院百二十五年史』資料編第一巻、三七二頁所収。
- (476) 須藤吉之祐（『学院現状』大学より申上候）（『立教学院学報』第八号、一九一五年一〇月）三三頁。
- (477) 「立教大学々友会規則」（『立教学院立教大学要覽』私立立教学院立教大学、一九一七年三月）『立教学院百二十五年史』資料編第一巻、三七二～三七四頁所収。
- (478) 斎藤茂（庭球部部长）「会則改正委員の観る学友会の現状（一）」（『立教大学新聞』第四〇号、一九二六年八月二五日）一面。
- (479) 新聞学会「弊害百出の学友会を解散せよ」（『立教大学新聞』第一三三号、一九二五年三月五日）二面。
- (480) 前掲「弊害百出の学友会を解散せよ」。
- (481) 一九二二年度の学友会予算委員会で、運動部の一部遠征費として学芸部から三〇〇円を譲渡した結果、両者の予算配分が二対一の比率となったという（両会の対立／一致は困難）『立教大学新聞』第五三三号、一九二七年六月一五日、三三三頁。
- (482) 「右手に解散論を掲げ左手で三百円を請求／危く解散されんとし文芸部の妥協でまとまる／学友会予算委員会」（『立教大学新聞』第一七号、一九二五年六月一日）二面。「激論八時間に及んだ伝統固執の予算委員会／分配比率問題に三度決裂／文芸運動各別室に凝議し辛じて妥協に終る」（『立教大学新聞』第三五号、一九二六年六月五日）三三三頁。「多数決に異議無用／学友会予算成る」（『立教大学新聞』第五三三号、一九二七年六月一五日）三三三頁。「依然慣例に準拠／学友会予算成る／両会意識的に対立し譲らず／採録し得ざる混乱」（『立教大学新聞』第六五号、一九二八年五月二七日）二面。
- (483) 「新設部みな否決／会則も無駄／慣例と感情は昔のま」（『立教大学新聞』第五三三号、一九二七年六月一五日）三三三頁。「無言挙手の力／雑誌部公認を否決／特別委員会を急設して危く救はれた委員会」（『立教大学新聞』第六五号、一九二八年五月二七日）二面。
- (484) 前掲「激論八時間に及んだ伝統固執の予算委員会／分配比率問題に三度決裂／文芸運動各別室に凝議し辛じて妥協に終る」。
- (485) 「学友会改造案／一紫会員堀江案」（『立教大学新聞』第一三三号、一九二五年三月五日）二面。
- (486) 前掲「弊害百出の学友会を解散せよ」。
- (487) 前掲「弊害百出の学友会を解散せよ」および前掲「学友会改造案／一紫会員堀江案」。
- (488) 「結局は改造か／学友会に対する学生団体の提案／委員会は回答を留保す」（『立教大学新聞』第一七号、一九二五年六月一日）三三三頁。
- (489) 一憂校の志士「学友会を解散せよ」（『立教大学新聞』第五五号、一九二七年七月一〇日）二面。
- (490) 「学友会改造に直面して学生側委員善後策を協議す／部長会の規約改正委員と協力して具体案を作成する」（『立教大学新聞』第四〇号、一九二六年八月二五日）一面。
- (491) 「学友会規則草案／委員会決定の全文」（『立教大学新聞』第五一

- 号、一九二七年四月一五日) 二面。
- (492) 「会則草案承認に／部長委員の連合会／小田原評議の部長会案／恭し返へされて異論百出／結局は修正承認」(『立教大学新聞』第五二号、一九二七年五月一五日) 三面。
- (493) 「委員会の延長に／予算総会終る／討論は無意義に／無言挙手者の勝利」(『立教大学新聞』第五三号、一九二七年六月一五日) 三面。
- (494) 前掲「無言挙手の力／雑誌部公認を否決」二面。吉川巨の証言によれば、新聞学会においても「学校が仲々予算をくれない」ことから「あまりバツとしない雑誌なんか廢刊して新聞へ金をまわせ」という声があったという(前掲「座談会」立大文化運動の潮流)二頁。
- (495) 「多数決一点張で／学友会総会閉つ／可決事項は委員会その儘／文芸部突如脱退す」(『立教大学新聞』第六五号、一九二八年五月二七日) 二面。
- (496) 「熱烈なる支持を受けて／断然文科会を結成／学友会に対する鬱憤遂に暴発し／一致邁進する全文科」(『立教大学新聞』第六六号、一九二八年六月一〇日) 二面。
- (497) 「学友会脱退宣言」(『立教大学新聞』第六七号、一九二八年七月五日) 二面。
- (498) 「脱退を一致決議／文科会第一回総会」(『立教大学新聞』第六七号、一九二八年七月五日) 二面。
- (499) 「解決委員を設け穩健策を講ず／学友会部長会議」(『立教大学新聞』第六九号、一九二八年九月二五日) 二面。
- (500) 「学友会に編入し三派鼎立／会則改正に方向転換した文科会の強硬談判」(『立教大学新聞』第七〇号、一九二八年一〇月一八日) 二面。
- (501) 「文科会の力闘空し／公認遂に否決さる／予算支出一蹴され再挙危まる文科会」(『立教大学新聞』第七一号、一九二八年一二月三日) 二面。
- (502) 「会長の誓約が唯一の力綱／暫く成行を傍觀する／進退不能の文科会」(『立教大学新聞』第七一号、一九二八年一二月三日) 二面。
- (503) 「部長会の不法越権は飽くまで弾劾する／学友会の学生自治を強調して／五日委員団の決議」(『立教大学新聞』第七四号、一九二九年二月一五日) 二面。
- (504) 「文学部の更生を望む」(『立教大学新聞』第九六号、一九三二年二月一九日) 二面。
- (505) 「学生よ学友会を守れ／委員団烽火を挙げ／不法に文化会<sup>文)</sup>予算支出を決めた部長会の専制を糺弾」(『立教大学新聞』第七四号、一九二九年二月一五日) 二面。
- (506) 前掲「部長会の不法越権は飽くまで弾劾する／学友会の学生自治を強調して／五日委員団の決議」。
- (507) 「二回会合し改正案進む／多方面の意見の参考として」(『立教大学新聞』第七四号、一九二九年二月一五日) 二面。
- (508) 「会則改正委員に会員を加へよ／会員から猛然起る」(『立教大学新聞』第七四号、一九二九年二月一五日) 二面。
- (509) 前掲「学友会新会則／部長会決定の草案全文」二面。
- (510) 「心を砕いた予算の配分／代議員制に依つて極力公平を期す／起草委員武藤教授談」(『立教大学新聞』第七六号、一九二九年四月

- 月二〇日)二面。
- (511) 「最後の総会通過し新会則全くなる／二日に亘つて討論応酬され／殆んど草案可決す」(『立教大学新聞』第七七号、一九二九年五月一日)二面。
- (512) 「学友会則細則／決定したその全文」(『立教大学新聞』第七七号、一九二九年五月一日)二面。
- (513) 「却つて暗影を投じた代議員選挙の結果／運動部殆ど絶体多数を獲得／新会則に非難起る」(『立教大学新聞』第七八号、一九二九年六月一日)二面。
- (514) 「何の新味もなく代議員会終る／すべて原案通りに通過／本年度予算成る」(『立教大学新聞』第七九号、一九二九年七月一日)二面。
- (515) 前掲「立教学生文化運動小史」二八～二九頁。
- (516) 「公認申請を一蹴され部外団体は悩む／各部の本年度予算案を決定し学友会予算会議終る」(『立教大学新聞』第一二二号、一九三二年五月二日)二面。
- (517) 「勃興した大学自治運動／誤られた立教精神を打破せんとする傾向」(『立教大学新聞』第一九号、一九二五年七月一日)二面。
- (518) 「当局の手違ひから予科商科二年騒ぐ／責任教授懲戒／試験の延期で解決」(『立教大学新聞』第一九号、一九二五年七月一日)三면。
- (519) 「大学自治を目標に／学生評議會を作れ／教授学生間に濃厚になつた自治要求の声」(『立教大学新聞』第二七号、一九二六年一月五日)二面。
- (520) 前掲「立教学生文化運動小史」一八頁。
- (521) 同右、三〇頁。
- (522) 「改善項目を掲げて商学部学生起つ／学生大会を開き歎願書提出／注目される成行」(『立教大学新聞』第八八号、一九三〇年五月一日)三면。
- (523) 前掲「立教学生文化運動小史」二二頁。
- (524) 「警笛」学校当局の誠意を問ふ」(『立教大学新聞』第八九号、一九三〇年六月一日)二面。
- (525) 「選手廿余名脱退／立教野球部の大動搖／リーグ戦の不成績から野田監督を排斥」(『東京日日新聞』一九三〇年一月十九日朝刊)一一面。
- (526) 「部員が嫌ふ監督擁立の必要なし」／立大野球部の騒動／脱退組選手が意見を發表」(『読売新聞』一九三〇年一月二〇日付朝刊)一一面。
- (527) 「立教野球部事件全学生へ波及／全学委聯公認と選手支持を大会を開いて決議」(『東京日日新聞』一九三〇年一月二二日付朝刊)一一面。
- (528) 「全学生委員会脱退組を支持／二部長調停に立つ／紛糾する立大の野球騒動」(『読売新聞』一九三〇年一月二二日付朝刊)七面。
- (529) 『学生思想事件一覽』第二輯、一九三二年八月、二七七～二七八頁(思想調査資料集成刊行会編『文部省思想局思想調査資料集成』第二〇卷、日本図書センター、一九八一年)。
- (530) 前掲「立教野球部事件全学生へ波及／全学委聯公認と選手支持を大会を開いて決議」。
- (531) 「解散はせぬ／富田野球部長の談」(『東京日日新聞』一九三〇年

- 十一月一九日付朝刊) 一一面。
- (532) 前掲「全学生委員会脱退組を支持／二部長調停に立つ／紛糾する立大の野球騒動」。
- (533) 前掲『学生思想事件一覽』第二輯、二七八頁。
- (534) 同右。
- (535) 「立教の紛擾円満解決／学長の回答を承認して」(『東京日日新聞』一九三〇年一月二三日付夕刊) 二面。
- (536) 「全聯公認を後日に／紛擾円満解決す」(『全学生大衆の力強き団結／今次の如き全学生的一致は本学開校以来のこと』(『立教大学新聞』第九四号、一九三〇年一月二五日) 三面。
- (537) 同右。
- (538) 「時間空間」(『立教大学新聞』第九四号、一九三〇年一月二五日) 二面。
- (539) 「予科文科二年B組委員制撤廃を決議／学校騒動頻発のをりから／当局事態を憂慮」(『立教大学新聞』第九三号、一九三〇年一月二五日) 三面。